
楽園のカフェラッテ！

冬森圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園のカフェラッテ！

【Nコード】

N8857Y

【作者名】

冬森圭

【あらすじ】

道端で少女を拾った。ろくに衣服も身に着けていない、幼い少女だ。身一つの貧相な身なりと、果たしてどこかに監禁でもされていたのだろうか、首輪が掛けられている。少女のつぶらな瞳とふわふわな髪の愛らしさ。そして、ちらちらと覗く尻尾……？ だらんと垂れ下がった耳……？ 少女は全く「犬」だったではないか！ ある日を境にして「犬」が女の子に見えるようになってしまった青年は、その犬ではなく少女を連れて帰ることに決めた。そうして彼の暮らす喫茶店は、人と犬とが交差する不思議な場所へと変

わ
っ
て
い
っ
た
の
だ
。

01 監禁少女を誘拐することにした

捨てられている。

傍を通りかかった青年は、はじめ一瞥もくれてやるつもりはなかった。

そのつもりだった。

雨は鈍色にびいろの空からしとどに降り注ぎ、青年の帰り道の、アスファルトを叩く。唯一、高架橋のコンクリート天井だけが、水滴から隔絶された空間を提供する。

高架橋の下は、周りに壁も何もないのに、内と外とを隔てているような気にさせた。雨音の一定のリズムは他の音を排他し、逆にこの場所を静かにさせる。雨の打ちつける町は、出歩く人もなく、無人のようだった。それと二人きりのような錯覚を青年にさせた。

この場所へ、同じくして雨をやり過ぎにきたということが、ふと彼の同情心を誘った。

天井の隙間から漏れ出て、所々にできた、水たまりに足を突っ込ませないよう気をつけながら、青年は近づいた。

「大丈夫か？」

それ 少女は、柱の陰にうずくまっていた。返事こそしなかったものの、そつと顔を上げて反応してみせた。

どうやらいちおうの元気はあるようだ。

「おまえ、どこから逃げ出してきたんだ？」

顔を上げたときに、革製の首輪が覗いた。きつく巻かれたその枷は見るに堪えない。鎖で繋がれていたのだろうか。そして何かの拍子にその鎖が外れて、今こうしてここまで脱出してきた、ということころだろうか。

人はそれを『監禁』とも言っが。

「……………」

少女のつぶらな瞳がくりくりと見つめてくる。瞬きするのも惜しいと言わんばかりに、じつと目線を離さない。雨に濡れた彼女の髪の毛が、頬に耳に張り付いている。

このままでは風邪でも引くかもしれない。そう思った青年はしかたなく、少女を連れて帰ることにした。

「とりあえず家へ来な。服くらいは乾かしてやるから」

青年は彼女にそつと手を回して立たせ、それから自らの上着を脱いで着せてやった。

ちなみに、これは『誘拐』にはあたらない。なぜなら……。

「あ、ありがとう……ごさいます……」

少女の後ろからちらちらと見え隠れしているものがある。青年の手が接触したときから、ぱたぱたと、彼女の尾っぽが振れていた。

そう……彼女は、まったく人間などではなかった！

「高架の下を歩いていこう、いけるとこまで。…………おいで」

「…………はいっ」

少女は顔をふるふると左右に振る動作をして、水を払い落とそうとした。人のそれとは違う、だらんと垂れ下がった耳が軽快に踊り、青年に飛沫した。

「あう…………ごめんなさい…………」

ひとまず、家に着くまでの辛抱だ。

02 犬とお店と姉ちゃんと

「あ、また店の入り口から入ったわね！」

扉の頭に取り付けた鈴がカラカラと鳴り、その音を聞きつけて、店の奥から店主の声があがった。

「ごめん。ちよっと、荷物があつてさ」

少し小降りになったとはいえ、外は雨模様だ。自家用の出入り口はこの店の裏側にあるので、遠回りするぶん余計に濡れなければならない。

把握したこの店の店主は、代わりにカウンターの奥から出てきて、『荷物』を出迎えることにした。

「おかえり、トシちゃん。……ありや」

「……ただいま」

トシと呼ばれた青年、嗣郎しゅうは気まずそうに、上着にくるんだ少女を抱いて立っていた。その両腕にちょうど収まる程度に小さくて、大きな荷物。それは、学校からの帰りに、制服を濡らして帰ってきたことよりも、ずっと彼の決まりを悪くさせた。

その荷物 当の少女はというと、嗣郎の体に抱きついたまま、縮こまっていて伏し目がちである。店に来るまでは、辺りをきよろきよろしたり、嗣郎の顔を見上げたりしていたのだが、どうにも嗣郎以外の人間を前にして落ち着かないらしい。彼女のぺたんと垂れた耳は、顔を隠さんという勢いだ。

人見知りなのかな……コイツは。嗣郎はひとり察した。

「いったいどうしたの、そのワンちゃんは？」

店主が嗣郎の顔と、『少女』とを見比べて言った。

「高架の下で見つけたんだ。首輪をしてるから、たぶん捨て犬じゃない」

「なるほど、ね……。とりあえず何か、拭くもの持ってきて来るわ」

「うん。頼んだ、甘姉あまねえちゃん」

この店の店主、姉の甘音は、一旦店の奥へと消えた。

甘音は、嗣郎の抱えているモノが『少女』には見えない。嗣郎の学校の友達も、甘音と仲の良いお隣さんも、この喫茶店に毎日コーヒーを啜りにやってくる常連客も、誰も彼もそのモノが『少女』だとは思わない。これは嗣郎だけに起こっている奇妙な現象なのだ。

「やっぱり女の子に見えるの？」

乾いたタオルを手に姉が戻ってきた。

「女の子なの」 嗣郎はことばの端にシニールさを滲ませた。「犬のタレ耳、女の子、尻尾つき」

ランチセットみたい、と姉がこぼした。タオルを嗣郎に手渡し、なかなか目をあわせようとしない少女を覗き込む。

「で、この子はどんな感じの子？ 私はあの犬の、子どもに見えるけど。何ていう犬種だっけ、えーと……ナントカ・ナントカー？」
「ほとんど情報ゼロなんだけどそれ」

嗣郎が少女に視線を落とすと、思わず目と目が合った。少女のほうはまるで何かを期待するかのように、じっと嗣郎を見つめていた。自然と少女の尻尾が、ふるふる振れだした。

彼女の尻尾と髪の毛は、淡いクリーム色で、柔らかそうだ。雨に濡れた毛先はくりくりと毛羽立っている。もっと伸びたら、波打つようなきれいな髪になるだろう。

嗣郎は少女の濡れた身体を拭いてやろうとして、途中で手を止めた。

「甘姉、やっぱり代わりにお願い、このまま抱えてるから」

タオルを姉に押し付けて、嗣郎はそれきり顔を背けた。

彼にとって『犬』のヴィジョンは、そう、健全でない。なぜならば、イヌは、ヒトと違って身に着けているモノがないから。

とはいえ、素っ裸というわけでもなく。

「肌着姿に見える……」

「へえ」

この助平え、と姉はおちくりながら、少女の
子犬の身体
を丁寧に拭いてやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8857y/>

楽園のカフェラッテ！

2011年11月26日19時46分発行